

クラシックヨットに寄せるパネライの情熱

# カリブ海へ、「アイリリー」大西洋を渡る

オフィチーネ・パネライが自らのブランドを代表する船として所有するクラシックヨット「アイリリー」が、今年初めに大西洋を横断した。この航海に日本人ヨット写真家の矢部洋一氏が同乗を許された。21日間におよぶ航海を振り返る。

写真／矢部洋一



(右)大西洋の波をバワフルに切り進むアイリリー。触先に刻まれた金のドラゴンは設計家ウィリアム・ファイフ三世のトレードマーク。



(左)アイリリーの舵を握るキャプテン、アンドリュウ・カリー。クラシックヨットを心から愛する若く有能な船乗りだ。



(左)長距離航海でもっとも大切な人は、シェフである。ステファノは、どんなに船が傾き、揺れていても見事な料理を作るすぐ腕のヨットシェフだった。



(右)帆走中、マスト上部の滑車に不具合を見つけたキャプテン、すぐにマストに登り対処した。大きなトラブルを防ぐため、クルーは常に船の細部に目を配る。

スペイン・カナリア諸島からカリブ海の島へ、東から西に向かって大西洋を渡る「アイリリー」の記念すべき大航海に一緒に乗りませんか、という魅力的なお誘いをいただいたのは昨年12月のこと。

木造のクラシックヨットで、しかもウィリアム・ファイフ三世が設計をした歴史的な名艇で、大西洋を渡れる機会などは、めったに巡ってくるものではない。もちろん、すぐに快諾した。

ところで、アイリリーが大西洋を渡り、カリブ海に行くのは何故そんなに記念すべきことなのか。

アイリリーはパネライのCEOアンジェロ・ボナーティ氏に見出され、ぼろぼろの状態から修復されて、昔と同様の見事な船に甦ること得た。船とボナーティ氏との出会いの場所が、カリブ海のアンティグア島だったのだ。

その船はもともと1936年に、スコットランドのウィリアム・ファイフ三世という歴史に名を刻む設計家によって造られた。アンティグア島のアンティグア・チャレンジャーの開幕戦が行われている。このレースにアイリリーと他のクルーたちは、本拠地のイタリアを出港して地中海を抜け、昨年クリスマスまでにはアフリカ北西岸沖に浮かぶスペイン領カナリア諸島のテネリフエ島に着いていた。

そこで、第二の故郷、アンティグアへの再訪が決まった。それも大西洋を横断して行くことに(もちろん帆走で)。アイリリーとそのクルーたちは、本拠地のイタリアを出港して地中海を抜け、昨年クリスマスまでにはアフリカ北西岸沖に浮かぶスペイン領カナリア諸島のテネリフエ島に着いていた。

大西洋を渡るために乗り組んだアイリリーのクルーは全部で6人だった。英国人キャプテンのアンドリュウ(34歳)、同じく英国人のステュワーデス、ジェシカ(21歳)、あとは皆イタリア人で、エンジニアのステファノ(43歳)、シェフのステファノ(32歳)に、助っ人クルーのエドアルド(35歳)とジヨバンニ(25歳)である。

ヨットにもステュワーデスなんているのか、と皆さんは思うだろう。いるどころか、ヨーロッパなどでは立派な職業のひとつとして存在している。個人所有の大型ヨットに雇われるのだが、何をするかというと、まず船に招かれるゲストの接客と、そのほかにもほかのクルーと一緒に船の掃除やメンテナンス、買い出しに洗濯、操船の手伝いなど結構忙しい。

られたヨットだった。19世紀後半から20世紀の半ばまで活躍したファイフ三世の造るヨットは、芸術的な美と技術的な完成度を併せ持つ特別な船として世界に認められていた。

アイリリーは、何代かの所有者を経て、1970年代にはカリブ海で多くの時間を過ごすようになった。その当時は、カリブでもっとも美しいヨットとして有名だった。しかし、しばらくののち、船は熱帯の苛烈な自然の中に放置されるようになり、ひどく傷んでいった。

このアイリリーが、ボナーティ氏との出会いをきっかけにパネライに引き取られ、見事に復活を遂げた。イタリアの優れた船大工によって修復され新たな命を吹き込まれ、昔のままの美しい姿に戻ったのである。

完成は2009年のことだった。アイリリーに総帆を掲げて、アンティグア島に戻るのは、ボナーティ氏の最初からの夢であった。その島では、毎年4月にパ

しかし、もしヨットや旅が好きならば、若い時には悪くない仕事だ。生活は船になるので、部屋代も食費もからない。給料はヨットの種類によって異なるけれど、年齢なりに普通の会社に勤めるくらいはもらえる。

さて、この6人にテネリフエ島で加わったのが、私ともう一人、英国の『クラシックボート』誌の編集長、ダンである。乗組員は全部で8人になった。

テネリフエ島からカリブ海まで、アイリリーの航海予定距離はおよそ2700海里(約4900km)だった。良い風が吹いて、平均速度7〜8ノット(およそ14〜15km/h、クラシックヨットとしては悪くない)で走れば、2週間ちよつとで目的の島に到着する。

いったん海に出たら、当然、昼も夜も帆を揚げて走りっぱなしになる。そこで安全で効率的な航海のために、船にはワッチ・システムがある。ワッチは英語でWatchだから、腕時計と同じ単語だが、船では当直という意味になる。

キャプテンのアンディは、私とダンを含めた8人の乗組員を2人ずつ4つの組に分けた。各組は、昼間4時間、夜間3時間ずつ交代でデッキに出て、見張りとおしにあたる。1日の時間の分け方は、

16:00	—	20:00	、	20:00	—	23:00	、
08:00	—	12:00	、	12:00	—	16:00	、

# BOUCHERON ブシュロン

☎ブシュロン カスタマーサービス ☎03-5537-2203

19世紀半ばの創業以来、時計ではなく、時を刻むジュエリーの創造を行ってきたブシュロンは近年、独創的なデザインと宝飾技術を生かしたジュエリー・ウォッチを生み出している。2010年にはジラル・ベルゴのスリー・ゴールド・ブリッジ・トゥールビヨンを搭載し、タカをモチーフとしたモデルを発表したが、今年はそのスワンが登場。メカニズムをデザインに融合させ、金細工と宝飾細工の高い技術を駆使し、1点について約1300時間を費やし完成させたという。また立体的な動物モチーフのジュエリー・ウォッチでも個性が発揮される。



「アジュレ カメレオン」。身につける人を守る力をもつというカメレオンをモチーフにしたジュエリー・ウォッチ。サイズが異なるダイヤモンド、ルビー、ツァボライト、マルチカラーのサファイアを巧みにセットすることによって自在に色を変化させるカメレオンを表現し、そのふっくらとしたボディが繊細な透かし彫り細工の小枝と対照をなしている。クォーツ。ケース径37mm。18Kホワイトゴールド。ホワイトサテン・ストラップ。予価705万6000円。8月発売予定。

ハイジュエリーの  
特技を生かした  
メカニカルな  
ジュエリー・ウォッチ

「トゥールビヨン シブリス」。「愛と忠誠のシンボル」とされるつがいのスワンを、ジラル・ベルゴ製スリーゴールド・ブリッジ・トゥールビヨンとジュエリー・セッティングの技で表現した、ブシュロンならではのハイジュエリー・ウォッチ。ホワイトはラウンドダイヤモンドとブルーサファイア、ブラックはブラックスピネルとブルー&パープルサファイアを、それぞれ18KWGにセットする。予価(ブラック)9334万5000円、(ホワイト)1億185万円。日本入荷未定。

# BULOVA ブローバ

☎ブローバ ジャパン ☎03-5408-1390

ブローバは19世紀半ばから1960年代までアメリカの時計産業を支えた主要メーカーのひとつであり、1960年に発表した「アキュトロン」を頂点に時計の世界に新たな試みを実現してきた。そしてアメリカン イノベーションを謳ってきたが、今年はいよいよそれを体現し、「ブローバアキュトロン キャリブレター」を発表した。ユーザーが裏蓋を開けることなく、自分で調速機構の微調整を行うことができる機構を備える。今日ブローバはシチズンの独立子会社だが、歩んできた歴史を尊重し、アメリカらしい革新性の模索が行われている。

アメリカン  
イノベーションの  
歴史を現代に  
伝える先進的試み

「ブローバ アキュトロン キャリブレター」。自動巻き、Cal.ETA2824を搭載し、付属のキーを使ってケース・サイドから緩急針の微調整をユーザー自身が行うことができる新開発機構、「EFAS=External Fine Adjustment System、超微調整システム」を装備。ケースの9時位置にあるクラウンを専用キーで操作し、日差約-15秒から+15秒の調整が可能で、文字盤9時位置にある扇形の目盛りで微調整を確認できる。ケース径42mm。SS。5気圧防水。シースルー・バック。価格17万5350円。9月発売予定。



「ブローバ アキュトロン サー・リチャード・ブランソン限定モデル」。ブランド・アンバサダーのサー・リチャード・ブランソンの協力を得て開発され、ローターに氏のサインを刻む。赤のGMT針(4時位置のリユズで操作)と文字盤外周に24都市リング(2時位置のリユズで操作)を備え、第二時間帯の時刻を表示する。自動巻き、Cal.ETA2893。COSC認定クロノメーター。ケース径46mm。チタニウム。10気圧防水。シースルー・バック。価格29万9250円。限定500個。9月発売予定。

# BELL & ROSS ベル&ロス

☎オールブルー ☎03-5977-7759

航空の世界を  
ベル&ロス流解釈で  
展開する  
「手首の上の計器」



旋回計



高度計



水平儀

「BR-01 ターン・コーディネーター」。航空機の旋回率(方向転換の速度)を示す飛行機型のジャイロ部分と、チューブの中のボールの動きで旋回にかかる力のバランスを示す傾斜羽のふたつの計器から成る旋回計をデザイン・ソースとする。文字盤の12時位置側の半円で時刻を表示し、時、分、秒の3枚のディスクが回転して時刻を示す。自動巻き、Cal.ETA2892(パワーリザーブ約40時間。毎時2万8800振動。21石)。ケース・サイズ46×46mm。ブラックPVD加工のステンレススチール。ラバー・ストラップ。10気圧防水。価格61万9500円。7月発売予定。限定999個。

「BR-01 アルティメーター」。高度計のデザインに倣い、大型の針を備え、斜線とALTの文字を文字盤に記している。また高度計では周囲の気圧を測定し海面からの高度を計測するため気圧表示窓があるが、これを模した日付表示を3時位置におく。ほかの2モデルと同様に針とインデックスに白の蛍光塗料を塗布し、夜間の視認性を高めている。自動巻き、Cal.ETA2896(パワーリザーブ約40時間。毎時2万8800振動。21石)。ケース・サイズ46×46mm。ブラックPVD加工のSS。ラバー・ストラップ。10気圧防水。価格52万5000円。7月発売予定。限定999個。

「BR-01 ホライゾン」。水平に対する機体の姿勢を示す水平儀(方向指示器)から発想したデザインで、2層の文字盤が特徴。下層の文字盤は3時と9時を結ぶ水平線を境にグレーとブラックに分けられ、上層の文字盤にインデックスを記している。分針にカウンターウエイトが付く。自動巻き、Cal.ETA 2892(パワーリザーブ約40時間。毎時2万8800振動。21石)ケースはステンレススチールにブラックPVD、ストラップはラバー。ケース・サイズ46×46mm。10気圧防水。価格49万8750円。7月発売予定。限定999個。

# 変わらぬして変わる

# 軌跡

ルイカルティエにとって腕時計は腕時計であり、懐中時計の延長ではなかった。彼は手首の上で美しさを放つものを創造することだけを考え、それはラウンドである必要はなかった。そして彼が生み出した完璧な造形美は時代を超越する。

1917年、ルイカルティエがルノー製の戦車をモチーフにデザインした腕時計が「タンク」の原型であることはいまさら言うまでもないだろう。ヨーロッパは第一次世界大戦の真っ只中であり、この戦争ではじめて戦車が陸に現われ、偵察機が空を舞った。時刻を瞬時に知るために腕に時計をする習慣が広まったのも第一次世界大戦がきっかけと言われる。



1917

Photo/Cartier Archives ©Cartier

「タンク」。1917年のデザインに基づき1919年に初めて製造されたオリジナル・モデル。18Kゴールド・ケースに9リーニュ(20.25mm)のムーブメントを搭載した。まっすぐに伸びた縦のライン、両サイドを結ぶ水平のライン、ブラックのローマ数字インデックス、線路状の目盛り、サファイアカポションとパール状の飾りをつけたリュウズという特徴を備え、これらは今日まで踏襲されている。



1922

Photo/N.Welsh, Cartier Collection ©Cartier

「タンク ルイ カルティエ」。1922年に「端が丸みを帯びたタンク」として登場したモデルは、やがて「タンク ルイ カルティエ」と呼ばれるようになった。写真は1925年に製造されたモデルで、オリジナル・モデルと比べて両サイドのバーが細く、また明らかに丸みを帯びている。18Kホワイトゴールド・ケースで18Kホワイトゴールドのデプロワイヤントバックルを備える。

20世紀初頭はマシンのエイジの始まりであり、交通や通信が発達し、それまでに時間が重要な意味をもった。第一次世界大戦はマシンのエイジの戦争であり、劣勢だったフランスは戦車隊の力でドイツ軍を敗北に導いたのだった。しかしルイ・カルティエを魅了したのは戦車のパワーよりも、マシンのダイナミックなフォルムと時の循環を思わせるキャタピラの無限軌道であったのだろう。ルイカルティエはすでに1904年に角型の「サントス」をデザインしていたが、幾何学的なデザインは1920年代に流行し



ルイ カルティエの友人だったポニド カステラーヌ公爵はダンディズムをきわめた人物だった。そして流行を先取りすることも厭わなかった。左手にはシルクのモアレストラップのタンクをつけている。そしてジレを横切るリボンから分かるように懐中時計を携えることも忘れてはいなかった。

Photo/©Paul Nadar

そして1930年代初めまでにオリジナルの基本をしっかりと守りながら、オリジナルを逸脱したバリエーションが生まれている。なかには夜間の視認性を高めるためにラジウム性の蛍光塗料を用いたものもある。また衝撃から守るために反転ケースも開発された。一方、さまざまな種類のブレスレットもデザインされ、タンクは10年ほどの間にカルティエの腕時計の基本として発展した。

# 原型から新たなオリジナリティへ



1921

(上)「タンク サントレ」。タンクを手首にフィットさせるためにケースを湾曲させている。後に「タンク アメリカ」の発想の源ともなったモデルだ。文字盤に記された線路状の目盛りの上下がわずかに曲線を描いている。写真のモデルは1929年製。アラビア数字のインデックスと針にラジウムの蛍光塗料を塗布している。サテン仕上げのゴールド・ケースで、ケースには「Felice from Fred '29」の刻印があり、アメリカのダンサーであり俳優、フレッド・アステアが購入した時計だ。1988年からカルティエ・コレクションが所有している。

Photo/N.Welsh, Cartier Collection ©Cartier

(左)「タンク シノワ」。カルティエは多くの異文化の意匠をデザインに取り入れたが、そのひとつが中国だった。中国の寺院の正門から発想したという井桁型のフォルムはシメトリーを成し、長方形のタンクは正方形に転じている。建築物からインスピレーションを得たタンクはこのモデルのみだ。横軸のサイドは縦枠にネジ留めされている。9リーニュのムーブメントを搭載したものが作られ、写真のモデルは1930年に製作された。

Photo/N.Welsh, Cartier Collection ©Cartier



1932

Photo/N.Welsh, Cartier Collection ©Cartier



1922



1928

Photo/N.Welsh, Cartier Collection ©Cartier

「タンク ア ギシェ」。“小窓付きタンク”は1928年に在庫台帳に登場した。この当時、アナログは流行遅れとされ、デジタル表示が流行し、それを取り入れた先端的なモデルだった。サテン仕上げのイエローゴールド・ケースのボリュームと広がり、そこに非常に小さく開けられた窓があり、メカニカルな強さがある。デジタルの流行は短命に終わり、このモデルの製造期間も限られた。しかしパティアラのマハラジャのように愛好家は存在し、彼は1928年にパリのブティックに注文し、購入している。

「タンク リバーシブル」。時計を衝撃から守るためにジャガーとともに反転ケースが開発され、1932年7月1日にスペシャリティ・オルロジュール社(ルクルト製時計の販売会社)がカルティエ専用として特許を申請した。ケースはジャガー・ルクルトの「レベルソ」と異なり、水平軸上で360度、縦方向にぐるりと回転し、フラットなリュウズが12時位置に付く。写真は1936年に製作されたモデル。1992年に「タンク バスキュラント」と名称が変更され、'94年までに413個が製造、販売された。

Photo/N.Welsh, Cartier Collection ©Cartier